2

視　写

言葉の力をつけよう（古文視写①）

〔随筆文学「枕草子」〕

名　前

**やってみよう**

平安時代に清少納言が書いた随筆「枕草子」の第一段を原稿用紙に視写してみましょう。不思議なことに、四〇〇字詰め原稿用紙一枚にぴったり収まります。

「枕草子」

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり、やみもなほ、蛍の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、烏の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど、飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。日入りはてて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もて渡るもいとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし。（第一段）

「枕草子」

400字　300字　200字　100字　0